世界平和統一家庭聯合・家庭盟誓の聖事的意味

安研姫(鮮文大、文化コンテンツ学科)

1.序論

世界平和統一家庭連合(以下、家庭連合)は、文鮮明・韓鶴子総裁を通じて祝福結婚式を受けた家庭が、真の父母の真の愛、真の生命、真の血統を相続して、真の家庭を作って、神の下に、人類一家族の平和理想世界を創建しようとする。家庭連合の信仰共同体儀式、そして祝福家庭の伝統と生活儀式は、その真の家庭以上の表現であり、これを成し遂げる実践的行為だ。

家庭連合の主要な儀式には敬拝式、訓読会、祝福式、聖別儀式、聖酒式、聖和式、名節礼拝、日曜礼拝と訓読家庭礼拝などがある。公的な礼拝と儀式をはじめとして、家庭単位の訓読会と敬拝式も皆、真の父母の伝統と先例に従う。礼拝と儀式の基本単位として敬拝、家庭盟誓、報告祈祷、み言訓読とつづく一連の順序は、家庭連合構成員が真の父母と告白する文鮮明、韓鶴子総裁が主管した敬拝式と訓読会の伝統である。この時、敬拝の後、祈る前の家庭盟誓(全 8 節)の奉読は、信仰共同体としての家庭連合の特徴的な儀礼の伝統だ。

このような家庭盟誓の位相は、形式的にはキリスト教の主の祈りや使徒信条(Symbolum Apostolicum)と似ているとみられる。主の祈りと使徒信条がカトリックのミサや新教（プロテスタント）の礼拝の順序の中に公教会の信仰告白に含まれているように、家庭盟誓も家庭連合の礼拝と祝福家庭の礼法と儀式に必須の部分として含まれる。家庭盟誓は摂理の進展と共に真のご父母様によって、一部追加、変更されたりもしたが、それ自体の位相は変わることがない。家庭盟誓は真の父母によって永遠なものと制定され、宣布された普遍的な‘公式’であるためだ。したがって家庭盟誓は家庭連合の実践体系において選択的で付随的な要素ではなく、必須的で本質的な家庭連合の聖事(sacrament)に該当する。

この時、聖事(sacrament)はキリストによって制定されて教会に委ねられた恩寵の表徴であり、感覚的な象徴を通じて効率的な恩寵を産むようにする神聖な儀式を意味するキリスト教の典礼の用語だ。すなわち救いに必須の効力があると見なされる教会の核心的儀礼を示す言葉だ。特にカトリック教会は、聖事の妥当性、必要性、効力を強調する事効論的(ex opere operato)な聖事神学を発展させた。聖事は神的救いと恩寵の通路として、キリストによって、普遍に教会(の弟子)に委託されたので、教会の適切な順序で成り立った聖事は執り行った弟子の霊的状態と関係がなく効力を持つという立場だ。しかし新教(Protestant Church)は聖事の効力と妥当性より、救いにおいて聖書と信仰を強調(Sola Scriptura, Sola fide)し、洗礼と聖体聖事を除いた他の儀礼の聖事的性格自体を否認する。

このように‘聖事’の概念は主にキリスト教神学によって専有され、定められてきたが、筆者は宗教現象一般に適用して、各宗教の救援論と密接に連結した宗教儀礼を叙述して研究するのに使えると見る。聖事(sacrament)の語源はギリシャの秘儀の宗教の mysterion、ま

た一方でローマの軍隊の信義と忠誠誓約(sacramentum, oath)に遡るのであるが、古代宗教史と関連したこの二つの意味はキリスト教の聖事の概念の中に‘神的救援への参加’と‘真実の誓約(vow)’という意味の地層で相変らず生きている。‘聖事’が排他的で特殊なキリスト教だけの典礼用語であるはずはない。

神的存在によって制定された、救援としての神的恩恵の可視的で感覚的な手段あるいは通路であるという聖事の意味は、宗教史の他の現象に拡大、適用可能であり、本論文で議論しようとする家庭連合の家庭盟誓を説明するのにも有効だ。先に言及した主の祈りや使徒信条などは色々なキリスト教の教派が共通に使う信仰告白として普遍的な信仰規範(Regula fidei、信条と翻訳されたりもする)に属する。ところでこのような祈祷文と信仰規範はたびたび典礼の中でひとつの要素として含まれるが、キリスト教で救援の恩寵が集中した聖事というよりは、信仰の内容として定式化された教義に近い。しかし家庭連合の家庭盟誓は使徒信条と同じように制定された信仰告白文であり、同時に真の父母の恩恵と祝福が正式化されて、祝福家庭に与えられて成り立つ恩寵の通路として聖事的な次元を持つ。それは誓いという言語形式の修行性と関連する。口頭儀礼としての家庭盟誓の暗唱は家庭連合の信仰の正当性と精髄に対する告白（言葉）だけでなく、 真のご父母様に従って新しい天一国創建を遂行する行為としての‘言語の聖事’である。

家庭連合は真の父母をメシア、救世主と告白し、真の父母を通じて祝福を受けて、四位基台を作って、真の家庭を完成することを創造理想の実現と信じる。祝福結婚の実践は単に世俗的な結婚ではなく、救援論的な意味を帯びた宗教的な実践だ。ところで祝福結婚式で頂点に至る重生の救援論的な言語は家庭連合の実践体系においては家庭単位の創造理想の完成という新しい言語に転換される。このような契機において、家庭連合の家庭盟誓は神と真の愛で一つになった真のご父母様の勝利圏が祝福家庭に相続されるように制定されたものである。したがって家庭盟誓の暗唱は真の父母の愛と恩恵によって、真の家庭に参与して真の家庭を完成していく偉大な聖事である。これは家庭盟誓が世界平和統一家庭連合の八大教材教本の中に含まれていて、八大教材教本全体を圧縮した天法の精髄と見なされているところによくあらわれている。

この論文は家庭連合の信仰と実践における家庭盟誓のこのような位相と意味を穿鑿しようと思う。家庭連合の礼拝と儀式、祝福家庭の礼式でいつも暗唱される家庭盟誓は、家庭連合の理想と実践が定式化されてあらわれた結晶体である。文鮮明先生み言選集と主題別選集である真の家庭と家庭盟誓には、家庭盟誓制定の意味と各節に対する奥深い解説が含まれており、天一国経典である天聖経に集約的に提示されている。1997 年、世界平和統一家庭連合の礼法と儀礼として編纂された「伝統 ： 礼法と儀礼」と 2001 年に編纂された「家庭連合時代の主要儀式と宣布式」シリーズが、時代的な脈絡を反映した価値ある出典を提供しており、月刊「統一世界」 と「史報」、「成約牧会」などから教会史の記録を得ることができる。『統一思想要綱』の付録 3 の‘四大心情圏と三大王権’の解説は、家庭盟誓に対する統一思想的な研究の道案内となる。今や、家庭盟誓を信仰と信頼で告白し、暗唱する

だけでなく、神学的、思想的な研究を進展させることが必要だ。それは家庭盟誓に対する成熟した信仰的な理解と実践を向上するのに寄与するだろう。

家庭盟誓の研究は神学的、摂理史的、典礼学的、宗教学的な接近など多様な観点から成すことができる。しかし先に提示したことのような豊富な原典にもかかわらず、本格的な研究はまだ浅い状況だ。韓国の場合、論文形式では家庭盟誓に反映された統一教信仰の正当性、すなわち統一教信仰の目標を天一国創建の信仰、聖子の家庭になる信仰、真の愛の実践の信仰として説明して、世界平和統一家庭連合の創立と教団名称変更以後、統一教会の信者は家庭的次元に信仰生活の焦点を合わせて平和世界を知行していると評価したムン・ソンヨンの研究がほとんど唯一である。これから家庭盟誓の価値に対して、適切に各節と主要概念の神学的意味に対する深みのある研究が、さらに活発になされなければならないだろう。

本論文はその試論的作業として、まず‘盟誓’という儀礼形式の特徴に注目して、家庭盟誓の聖事的次元に対する理解を試みた。特に誓い一般に対するジョルジョ・ アガムベン(Giorgio Agamben)の研究と言語の遂行性に対する言語遂行理論(speech act theory)の洞察からヒントを得た。家庭連合の信仰の中で家庭盟誓は真の父母が制定して宣布された偉大な誓いだ。盟誓を言語の聖事と見る理論は、このような家庭盟誓がどのように真のご父母様が完成完了された神中心の家庭的四位基台を手本にした天一国主人になる真の家庭を作っていく聖事になっているのかを分析できる有用なる理論的枠組みを提供する。

2. 世界平和統一家庭連合と家庭盟誓宣布、真の家庭の新時代

家庭盟誓は 1994 年 5 月 1 日、世界キリスト教統一神霊協会創立 40 周年を記念して、私の誓いと家庭宣誓の代わりを成す新しい盟誓文として宣布された。それまで世界キリスト教統一神霊協会の構成員(食口)は日曜日の朝と教会の名節、元日敬拝式などで‘私の誓い’と‘家庭宣誓’を暗唱した。私の誓いは 1962 年 10 月 28 日の子女の日(陰 10 月 1 日)に、神の息子と娘の指針として制定、公布された。‘私の誓い’は一人一人が堕落人間を救援してきた神のみ旨を相続して、恩讐とみなされたサタンを審判する時まで、理想世界を実現していく責任を成しとげて、神様に喜びと光栄をお返ししようと、悪の勢力と戦い抜くことを宣誓して誓う意志の内容を含んでいる。このように世界キリスト教統一神霊協会時代の‘私の誓い’が、蕩減復帰過程で統一教会信者が神の子女としての名分を取りそろえるためのものであったとすれば、時期的にはたとえもっと先立って制定されたが、‘家庭宣誓’はそういう子女としての資格を回復して祝福を受けた家庭の誓約だった。

このような私の誓いと家庭宣誓の二元構造が、第一次 40 年蕩減路程を勝利した土台の上で、真の父母と成約時代を宣布して世界平和統一家庭連合を創設した以後に、新しい家庭時代の到来とともにはじめて家庭盟誓として統合一元化されたのだ。1994 年第 2 次 40 年路程の出発と共に宣布された‘世界平和統一家庭連合’時代は、蕩減復帰時代が過ぎ去って神の創造理想時代が到来したことを意味した。宇宙の根本単位が個人から家庭に、天国入

城の基本単位も個人から家庭に変わり、個人救援時代が家庭救援時代に転換されたのであった。そういう摂理的な段階で制定された家庭盟誓は“家庭が主体になる平和と和平の時代に合う告白文”であると理解された。

一方、宣布当時、文鮮明先生のみ言によれば、家庭盟誓は“以後、すべての祝福家庭と公職者と食口達の生活と行動の標準”であり、祝福家庭の偉大な連合である世界平和統一家庭連合の絶対的規約、憲法として与えられた。ここで留意すべきことは、まず家庭盟誓の主人が一次的に真の父母ということである。すなわち私たちの告白以前に真の父母の成就と宣布の結果である。二番目に、絶対的規約、憲法などの表現は蕩減時代でなく創造理想時代の観点から理解しなければならないということだ。憲法、絶対的規約としての家庭盟誓は、違反と処罰を含んだ蕩減復帰時代の法的強制と関係がなく、あらかじめ与えられた恩恵深い祝福と理解されなければならない。家庭盟誓は真の父母と真の家庭の蕩減路程と勝利的基盤を通じて、永遠なる祝福として人類に与えられた最高の遺産である。

“創造理想圏に入った家庭が、いかにあるべきかという内容が家庭盟誓に入っており、真の父母様の勝利的盾として防御できる摂理史全体を代表した 7 つ(後に 8 つ)の項目が誓いを中心としてみな入り、これを中心として新旧約を完成して、原理を分からなくてもそのまま家庭だけが神のみ旨を中心として絶対信仰、絶対愛、絶対服従できる基準を超えて行けば、天国へ入れるのです。”

家庭盟誓はこのように真の父母様が人類に‘真の家庭’の勝利的盾として、天国へ入れる鍵としてくださった。真の父母の勝利的基盤により真の家庭完成の標本、すなわち青写真ができたためである。家庭連合における‘真の家庭’は、まず神の創造理想が地上に実体的に顕現された真の父母様の家庭、すなわちすべての祝福家庭の祈願であり、モデルの固有名詞としての‘真の家庭’を指し示す言葉である。また真の父母の祝福を受けた家庭が各自将来成し遂げなければならない理想家庭も、しばしば一般名詞として真の家庭と表現される。祝福家庭は真のご父母様の家庭を見習って、神を中心に四位基台を完成した真の家庭を作って、地上天国、天上天国を実現して世界平和の創建者になると誓約した家庭である。家庭盟誓は一次的で固有なモデルとしての‘真の家庭’が、一般的な真の家庭として普遍化することができる標準であり、公式であるという。

蕩減復帰路程を勝利した土台の上で、成約時代の創造理想世界への転換を知らせながら宣布した家庭盟誓は、祝福家庭が今や、いかにして具体的に真の家庭を完成して、地上天国と天上天国を成し遂げなければならないのかを明確に提示しているのだ。したがって家庭盟誓は祝福中の祝福であり、福音中の福音であり、人類歴史になかった新しい誓いとなる。真の父母となられたメシアの顕現、血と汗と涙、完全投入の真の愛を通したサタン屈服の実体的な路程と偉業を通じて、すなわち真の父母があらかじめ家庭盟誓を成就するその道を歩いていかれた後であるから制定、宣布できたのである。

したがって家庭連合の構成員は悔い改めと感謝の気持ちで、家庭においてや、祈る時や

公的な集い、毎日の敬拝式、訓読会などで必ず家庭盟誓を暗唱しなければならない。

“1994 年 5 月 1 日から家庭盟誓時代が始まります。今までの誓約文を持って、‘ご父母様がみな成し遂げられたのを代わって相続して新しい誓約文に移ります’と祈ってください。そうです、それを相続して‘このような新しい家庭盟誓時代へ移されます’と言って、申し訳ありませんと言って全部祈らなければなりません。悔い改めなければなりません。今からは‘私の誓い’と‘家庭宣誓’は止めて‘家庭盟誓’をしてください。家庭でない人も家庭盟誓文を皆同じくするのです。一般の人もみなここに入らなければなりません。”

驚くべきことにこの時、家庭盟誓は祝福家庭でない一般の人にも拡大し、開放されたのである。それは家庭盟誓が、真の父母がすべて成し遂げたという基盤、堕落した世界との関連を完全に清算した基盤で、あらかじめ万人に先取、成就された祝福であることを見せてくださる。家庭連合の創設と共に、このように人類全体に永遠をおいてなされた家庭盟誓の宣布は、統一教会の正当性を越えて、天一国時代を指向していると言えよう。そうして 2013 年天一国元年、天歴 1 月 13 日、天一国基元節を基点として成約時代を越えて、真のご父母様を中心として創造理想世界が地上に定着する天一国時代が宣布された。真の父母の祝福を通じて、真の生命、真の血統、真の愛を相続した祝福家庭は天一国主人として神氏族メシアになって、天一国定着時代を開く使命を与えられた。

1954 年に創立した世界キリスト教統一神霊協会中心の統一教会時代が過ぎ去り、1997 年に世界平和統一家庭連合時代に転換された摂理史的な過程が最終結実完成の形態として現れたのが天一国時代である。真の父母が蕩減復帰時代にサタンと戦って勝利した全勝記録は、天一国国民のための八大教材教本に集約され、過去、現在、未来のすべての祝福家庭に残された。家庭盟誓は八大教材教本の中で分量としては最も短いが、天一国国民が完成しなければならない内容を含んで集約した要諦だ。これに天一国基元節以後に編纂された天聖経の第 12 編、天一国 3 章は‘天一国国民の道と家庭盟誓’という題で、家庭盟誓の意味と各節の解説を提示している。

初めて制定された以後、家庭盟誓は摂理の進展の中で何回かの挿入と追加、句節の変化を経て、現在の天一国の家庭盟誓に至っている。1994 年に制定された家庭盟誓は、初めは 7 節までであったが、成約時代の宣布とともに共通の導入部分の後に“成約時代を迎え”で始まる 8 節が追加された。1998 年 11 月 21 日、家庭盟誓 7 節に‘為に生きる生活を通して’が挿入され、2001 年天宙平和統一国(天一国)が宣布された翌年の 2002 年 11 月 5 日、第 43 回真の子女の日に家庭盟誓の各節の文頭に‘天一国主人’が追加挿入された。2004 年 4 月 18 日には、家庭盟誓 2 節‘聖子の道理’に‘家庭’を追加して‘聖子の家庭の道理’になり、8 節の‘解放圏’の次に‘釈放圏’が挿入された。悪なるカイン世界と善なるアベル世界の闘争の歴史の終息を宣布した 2004 年 4 月 13 日のカイン・アベル釈放宣布式の基台のためであった。釈放圏を完成するということは、堕落人間が堕落以前の創造本然の状態を

回復して、創造本然の生活を送ることになるということを意味するのである。実体的な天一国時代を開く天一国基元節の宣布を目前に控えた 2013 年の元旦に、最終的に 2、4、6 節の‘神様’を‘天の父母様’に、8 節の成約時代を‘天一国時代’に変更して、全 8 節が現在、天一日国経典である天聖経と天一国憲法の中に含まれている。

このような家庭盟誓の制定と変遷は真の父母様によって、摂理的な過程の中で成されたことであり、家庭盟誓自体の意味と価値に変化を与えるものでない。むしろ真のご父母様の摂理史に対する明確な認識を通じて、明かされなければならないだろう。家庭盟誓が初めて制定される時に語られたみ言のように、家庭盟誓は“歴史時代にない”誓いとして、新しい時代の主役、天一国主人である真の家庭の青写真を提示する“天国に向かう、天国を完成した家庭盟誓”であるためだ。

3. 言語の聖事としての家庭盟誓

それなら家庭盟誓はどのようにして祝福家庭を天一国主人である真の家庭として完成するのか？これに対する理解は祝福家庭の正当性を表現する家庭盟誓の信仰告白的な性格では充分でない。さらに根源的に家庭盟誓が言葉と事態（行為）が一致する神的な創造の言語として、遂行的な力を持った‘言語の聖事’という点に注目する必要がある。この章で私たちは西欧古代政治、宗教史に現れた‘盟誓’制度の遂行性と神学的人間学の意味を参照しながら、このような誓いの意味に接近してみようと思う。そして文鮮明先生ご夫妻の真の父母・メシア宣布と神聖な盟誓の主人であり、制定者としての位相を連結させて、家庭盟誓の聖事的な力を理解しようと思う。

古代から宗教的、法的性格を持った盟誓という制度、そして聖書の誓いとキリスト教の誓いの禁止、告白と同じ真実に対する義務を比較検討することによって、家庭連合の家庭盟誓の聖事的な性格を考察してみよう。誓い(horkos, sacramentum)という言語形式は、古代からある事態に対する陳述ではなく、陳述や約束の実現、真実性と有効性を保証する偉大で神聖な言葉として人間社会の必須の部分と見なされてきた。これと関連して、古代ラテン語で法(ius)の動詞形である iurare(誓約する)という点に注目して、法の始原と誓約、誓いを結びつけた古典的研究が成されている。一歩進んで、‘真なる言葉’としての誓約、誓いは法や宗教の単純な未分化状態でなく、さらに始原的で遂行的な先法、先宗教としての言語の経験と関連するというジョルジョ・アガムベン(Giorgio Agamben)の研究は非常に興味深い理論的枠組みを提供する。

それによれば、古代の盟誓制度は言葉の真実性を確保するために、違反時に呪いを含んだ神的保証をたてる呪術の宗教的な領域から出たことでなく、むしろ反対に、始原的で遂行的な言葉の経験である盟誓から宗教と法が出現したのだ。すなわち真の誓いが解体されるのを防ぐために法や宗教が登場した。古代の文献で誓い、誓約を意味する horkos, sacramentum が法を意味する ius と重要な宗教的概念である信仰（信頼、信任）に該当する pistis, fides と語源的に連結しているのは、説得力のある論拠となる。言葉の真実性と信頼性

を発言自体で遂行的に確言する誓いは、‘話す存在’で社会的存在としての人間の実存的条件、すなわち言葉と事物（事態）と人間の行為を一つにまとめてくれた根源的で倫理的な関連というものだ。

“人間の言語は、自身の中をさらけ出して、話者が話すためにはいつも引き受けなければならないある形式を自分の中に用意するという事実、言い換えれば、話者とその言語の間に設定された倫理的関係にあるのだ。人間は話すためには必ず‘私’と言わなければならなくて、‘言葉を捉えて’抱え込んで、自身のものとして作らなければならない生命体だ。”

あたかも古代の哲学者達がオケアノス(Oceanos)とテティス(Tethys)とともに神々の誓いの役割をする、スティックス(Styx)という水を宇宙の第一原理の中に置いたように、古典世界の誓い(horkos, sacramentum)は、最も古く、貴重であり、神々さえも屈服して処罰を受けるほかはなくさせる唯一の力と見なされたという。それは宇宙の起源とそれを理解する思惟の起源にどんな方法ででも誓いが内包されたという仮説を示唆する。

アレクサンドリアのユダヤ人、フィロン(Philo of Alexandria)は、聖書的基盤からこのような誓いの性格を素晴らしく解説した。彼は、「創世記」22 章 16-17 節で、神のアブラハムへの誓いに対する註釈で、誓いを神のみ言との本質的な関係の中で配置している。

“神だけが最も強力な保証であるので、まずその方自身に対する保証であり、次にその方のされることに対する保証であるから、その方自身に関して確言をする時、当然その方自身をかけて誓われたことであり、これはその方が神であるから可能であることだ。”

フィロンの注解に対するアガムベンの要約によれば、1) 誓いは言葉の事実の実証、すなわち言葉と現実の間の正確な対応によって規定されながら、2) 神のみ言はすなわち誓いであり、3) 誓いは神のみ言であるからただ神だけが真の誓いをなさるのであり、4) 人間は神にかけて誓ってはならないし、その方の名にかけて誓わなければならないのであり、5) 私たちは神に対して全く分からないから、その方に対して私たちが成せる唯一で確実な規定は、その方はその方のみ言が、すなわち誓いの存在、その方のみ言がそれ自体で絶対的な確実性を持った証拠になる存在であるということだ。

要するにロゴスである神は、語ってそのまま成し遂げる方であるから、言葉と行為、言葉と事態の間にすき間のない方であって、言行一致と規定される真の誓いの主人である。このような誓いは、神とその方のみ言を規定するという点で神学的概念とも言えるが、人間の言葉を神の言葉という凡例と結びつけるから、人間学的な水準でも起きる。万一、誓いが事実上いつも事実として実現される言語であって、まさに神のみ言のようであるならば、人々の誓いは、人間の言語をできるだけ最大限、真実にすることで、神のみ言であるというあの神的なモデルと一致させようとする試みだと言える。

ギリシャ・ローマの伝統で誓い(horkos)こそ最高の信任(pistos, 真実性)であり、ユダヤの伝統では pistos、すなわち eman こそ、唯一の神の属性であるということに着眼したフィロンはこのような類比を発展させて、神と誓いの間の本質的な関連を設定したのだ。それから筆者は誓いを神のみ言自体として見る観点を得ることになった。真実で、力のある太初のみ言、そのみ言と一体となった存在者である神、その言葉であるロゴスは、誓い自体であり、誓いのイデアである。人間の誓い、新旧約聖書に登場する数多くの‘誓い’と契約、約束の言葉は太初のみ言で、世界を創造した神の誓い自体であるみ言をモデルにしていると見ることができる。

しかし聖書はまた、偽りの誓いをしないで、神の名をみだりに唱えるなと繰り返し、警戒してもいる。その上、福音書では、イエスは弟子たちに天を指しても地を指しても誓わず、そしてあえて誓うなと言いながら、すべての形式の誓いを明確に禁止している。それならば神のみ言を誓いの原形で見る観点では、このような誓いの禁止、誓い破棄の句節をどのように見るだろうか？

誓いとは、そういうことが起きているというまさにその事実自体として証言（または保証）を独立的に成就する口頭行為である。フィロンの解説のように、必ず成就するみ言である誓いの定義に完全に当てはまるのは、他でもない神のみ言である。人間の言語は、それ自体で自身の存在の真実性に対する証言を含まないならば、一言も成立できないという点で、証言と誓いは人間の言葉が成立するための条件であり、言語の始原でありうる。人間のすべての発言行為の根源に神のみ言、すなわち誓いがあるのだ。しかし人類歴史において、誓いはこのような神的誓いを模倣して、時に神の名前で神的保証を通じて誓うにもかかわらず、言葉と事物の正しい関係、言葉と行為の実証に到達できない。その時、誓いは誓う者にブーメランのように呪いとなる。したがって古代から盟誓制度には、違反に対する呪いが含まれていたのだ。誓いに対する警戒とイエスの誓いの禁止は、自らのみ言と真理と生命である存在、すなわち誓い自体の存在として、人間による誓いの頽落と誓いの破裂が呪いになるのを防ぐための警戒であったと理解することができる。

しかし興味深くも、キリスト教が発展させた信仰(pistis, fides)の神学と、homologia、告解聖事(penance)のような儀礼の根幹において、私たちは真実に対するさらに強化された徹底した誓いの神学、ロゴスの神学を見ることができる。したがって誓いを禁じる聖書の一節は、むしろ真実の誓いであるロゴスの神学を守護するためにといえるであろう。旧約聖書は‘み言’で天地を創造する神、人間と口約束（遂行）を結ぶ神を通じて、誓い自体である神を証言している。旧約聖書を新しい福音として明らかにしたキリスト教は、イエス・キリストを太初にあったみ言、すなわちロゴスの神と解釈して、み言に対する信仰を宗教的な経験の中心的で、本質的なものと規定しながら、自分自身に対する真なる義務を課しているのであるが、このようなみ言に対する信仰と真なる義務は誓いから譲り受けたのである。キリスト教こそ‘ロゴス’すなわち、み言の固有な意味でのロゴスの宗教であり、誓いの神学を展開しているのだ。偽りの誓い、破壊された誓いは、このようなロゴスの神

に対する神聖の冒涜の可能性を含んでいるという点から見る時、聖書上の誓いの禁止は真の誓いを否定したことではなく、逆に真のみ言であり、誓いであるロゴスの神に対する神学に基づいたものと見ることもできる。

今まで考察した誓いに対する理論を通じて、私たちはユダヤ・キリスト教の聖書に現れた神のみ言は、言葉と事態、行為が一致する真の誓い、誓いの原形としての創造のみ言であり、言語的存在である人間と社会に生命をあたえる真理と生命のみ言という理解に達することになる。これは今、私たちが世界平和統一家庭連合の家庭盟誓を理解するのに非常に有用な理論的枠組みを提供する。

神は太初にみ言で天地を創造された。キリスト教が、み言がそのまま肉体になられた神の息子であると告白するイエス様は、自ら、道であり、真理であり、生命であると言いながら、誓いでなく信仰を要求した。そして家庭連合が再臨のメシアであると告白する文鮮明先生ご夫妻は、真の父母と成約時代の宣布と第 4 次アダム圏宣布、神様王権即位式、天一国の宣布を通じて、天の父母と真の父母の一体圏、主体的天上世界と対象的地上世界の統一圏とともに新しい世界を創造しておられる。神様(天の父母様)と一つになられた真の父母は、言葉と事物、言葉と行為の間のすき間のない誓いの主人として、私たちに、再び誓い、すなわち真なる言葉を回復して、宣布された。

家庭盟誓 8 節の‘絶対信仰、絶対愛、絶対服従’は、神が先に見せてくださったみ言を通じた創造、すなわち言葉と事態(行為)の一致する誓いの思想を明快に提示している。神がみ言で天地を創造されたことは、疑いがなく、二つの違った思いがなく、自分の意識観念がない完全なゼロ、完全な無からの実践である絶対信仰、絶対愛、絶対服従で言葉と行為(事態)の一致を成し遂げたられたためである。真のご父母様も探された原理のみ言に対する絶対信仰、絶対愛、絶対服従を通じて、神と真の愛で完全な神人愛一体を成し遂げて勝利された。真の父母はその基盤、すなわち言葉と行為、言葉と事態の間に亀裂がないみ言の主人、誓いの主人になられた基盤で家庭盟誓を制定して、宣布されたのである。

真の父母を通じて宣布された家庭盟誓は、そのように、言葉と行為、言葉と事物が分離されないで一致した創造のみ言であり、そのみ言が祝福家庭において成り立つようにする聖事である。先に考察したように、聖事を意味する sacramentum は、すなわち誓いを意味したりもすること、人間の言語は事態、行為と一致する真実な言葉としての誓いを前提にして、それを指向しているということを吟味するならば、言語の聖事としての誓いの真の意味を理解することができる。

家庭盟誓を暗唱する祝福家庭は、み言による創造に参与しながら、創造主である神の主流思想である絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神の創造した主体的な理想圏内の相対として真の家庭を完成しなければならないのだ。家庭盟誓の暗唱は、私たちの家庭が“創造された神の本然の位置”に帰って、言葉がそのまま行為である神の創造性に似ながら、盟誓の中で語り、成就していく真の言葉の聖事である。

家庭盟誓がすなわち天一国の憲法、家庭連合の絶対規約であるという意味は、すなわち

家庭盟誓がそのような遂行的言語であり、言語の聖事としての天一国国民の道であり、真理であり、生命であるという意味であると見てもよいであろう。これは言葉と事態の間にすき間がない真実な言葉、発言がすなわち遂行であり、成就であることを、真のご父母様がみ言と摂理的な生涯を通し見せてくださり、教えてくださることによって、蕩減が必要なく、救援が必要ない時代を開いて下さったという標しでもある。

4.　天一国主人になること ：家庭盟誓の聖事的意味

ここで私たちは聖事(sacramentum)を、すでに成就した言葉、すでに成就した救援と完成に、私たちが言葉と行為で参与しながら、その原形を繰り返す儀礼であると再定義してみることができるであろう。このような聖事は一回的(あるいは制限的回数)に敷居を越える移転の聖事（例えばカトリックの場合、洗礼、婚姻、病人の聖事）と、反復的に恩恵に参与する反復の聖事(告解、聖餐など)がある。

家庭連合においても、真のご父母様のメシア的成就に参与して相続を受けるようにする核心的儀礼を聖事と称することができるが、祝福式、聖和式、聖酒式などは移転の聖事として、訓読会、敬拝式、家庭盟誓の暗唱は反復的恩恵の聖事と分類して見ることができる。このような聖事を通じて、 真のご父母様が語られ成し遂げられたことに従って語り、行う時、家庭連合の祝福家庭は天の父母様と真のご父母様と一つになった位置で真の愛と真の家庭を完成して、真の世界を成し遂げることになる。

したがって文鮮明先生は、天一国の実体的な生活圏の中心となる家庭盟誓の重要性とその意味を幾度も強調された。要諦は祝福家庭が形式的に家庭盟誓を覚えるのではなく、家庭盟誓を暗唱しながら、完成しなさいということだ。家庭盟誓の暗唱は私たちの家庭を‘天一国主人私たちの家庭’という誓いに合わせていく遂行的過程にならなければならない。家庭盟誓の完成化時代がすなわち天一国定着時代となる。文鮮明先生は旧約、新約時代を蕩減復帰して、成約時代を宣布するまで、万物を犠牲にし、子女を犠牲にし、 父母を犠牲にしながら、家庭盟誓を完成できる基盤を成し遂げるための路程があったことを語られた。家庭連合の家庭盟誓は救援摂理史の最終結実として、祝福家庭への真の父母の福としてのプレゼントであり、偉大な遺産として与えられたものである。

“家庭盟誓は真のご父母様の全勝記録です。侍義時代である成約時代の教えを与える法度です。家庭盟誓は真の愛を骨として、真の家庭を心臓として立て、皆さんの人生を神と連結させる橋です。神を占領する真の愛の核爆弾です。家庭盟誓は縦と横、南と北、前と後を連結する中心に真の愛を迎えて、永遠の球形運動を出発させるエネルギーであり、知恵です。家庭盟誓は天国の門を開ける鍵です。天国の門は金や銀で作った鍵で開けられる門ではなく、真の愛で完成した真の家庭の鍵で開かれる門です。”

家庭盟誓はこのように真の父母の心柱で作って、人類に下さった鍵、真の父母の永遠の遺産として相続させた天国に入る鍵である。だから福音中の福音である。文鮮明先生のみ

言によれば、天国の門をあける鍵は夫婦が神を迎えて一つになるところから出発する真の家庭であるが、そういう真の家庭が成し遂げなければならない創造の具体的な理想を明示しているのが家庭盟誓である。したがって家庭盟誓は各家庭が真の愛を中心とした天一国主人になって、創造理想世界を成し遂げることができる正道としての‘天国に入る’鍵である。

したがって真のご父母様のみ言は、具体的に祝福家庭がどのようにして家庭盟誓を通じて真の家庭を作っていくべきなのかを教えてくださる。第一に、祈る前に、心と体が一つになり、夫婦が一つになったところで、盟誓文を唱えなさい。第二に、盟誓文を前にして、家庭全体が絶えず悔い改め、感謝しながら誓いなさい。第三に、一日に五回祈る前に盟誓文を暗唱して、盟誓文の理想と標準に照らして、朝の訓読会と夕方の訓読会において、自身と自分の家庭の状態をいつも点検、検討しなさい。家庭が一つになって家庭盟誓を暗唱し、家庭盟誓を通じて省察する生活をすることによって、真の父母が成就された真の家庭を各祝福家庭も完成しなければならない。

“盟誓文を毎日暗唱して、寝ても覚めても、朝食を食べる時、昼食を食べる時、一日に三食、食べる時も考えなければなりません。その次に寝る時も考えてみて、私の心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになるのに最善をつくしたか？そのように反省しながら、これを毎日のように生活の標準としていかなければならないのです。夫婦どうし闘っていたら唱えられないのです。**家庭**盟誓を唱えることができないことが、どれくらい苦しいことかを感じることができなければなりません。それが盾なのです。”(文鮮明先生み言選集、266-143)

結論的に、家庭連合の家庭盟誓は第一に、真のご父母様が堕落の痕跡である蕩減復帰路程を越えて真の愛でサタンを完全屈服した基盤、み言をすでに成就された基盤で宣布した誓いとして、神の誓いのように言葉と行為が一致した創造本然の誓いである。したがって家庭盟誓は記号と意味の間で揺れ動く言葉でなく、標準的な定式であり、成就した言葉として言語の聖事である。二番目に、家庭盟誓はすべての祝福家庭が真のご父母様がみな成し遂げられたことの恩恵としてくださった偉大な誓いに同参することによって、天一国主人になる真の家庭を完成するようになる遂行的言語としての聖事である。家庭盟誓の暗唱は、祝福を受けた家庭が真の家庭の勝利圏を相続して、神の創造理想である四大心情圏と三大王権と皇族権を完成した天一国主人の家庭になる遂行的儀礼である。

5. 結び

世界平和統一家庭連合は、真の父母の顕現を通じて、人類が創造本然の位置へ帰り、家庭の生活圏の中に真の父母を迎えながら生きる成約時代、地上天国天上天国を創建していく天一国創建時代を開きつつある。そういう時代の旗のような家庭盟誓は人類歴史になかった真の誓いであり、福音である。家庭盟誓とともに私たちは、人類歴史に出現した出家

と禁欲の宗教、神を探すために身体を否定して両親、兄弟、氏族を捨てた宗教の時代が過ぎて、成約と侍義時代の新しい還故郷の宗教、心と体、夫婦が一つになる家庭的四位基台の中に天の父母様を迎えて、本郷に安着できる宗教の向こうの創造理想時代に進入することができるようになったからである。

今まで私たちは、世界平和統一家庭連合の信仰告白文でもある家庭盟誓が言葉と行為(事態)が一体である神の創造のみ言、み言の実体としてのみ言を全て成し遂げられた真の父母の誓いに同参して、祝福家庭が天一国主人となる真の家庭を完成していく核心的儀礼として、聖事的な性格を持っていることを考察してみた。この作業は、‘盟誓’という口頭儀礼の形式的側面に集中して、聖事的意味を試論的に探求してみた。家庭盟誓文の各節に対する奥深い研究と摂理史的理解の中で家庭盟誓の意味を明らかにする歴史的な研究によって、補完されなければならないという限界があるのは明確である。このような研究は今後の課題として残す。